

輝け！シン尾花沢中

第95号

令和8年

9月9日

つたえゆかしい 校章よ おおむつましく 丘かげに

社会の一員として～県少年の主張最北ブロック大会～

8日（火）、村山市民会館を会場に、県少年の主張最北ブロック大会が行われ、本校から山口さんが出場しました。その弁論内容を紹介します。

社会の一員として

「通知表にも関わるし、参加してみようかな。」

中学一年の夏、市内の老人ホームの窓拭きに同級生と参加したのが、私の最初のボランティア体験です。まだ暑さの残る放課後、バケツと窓を何往復もして、高いところまで手をのばして汚れを拭き取るのは想像以上にハードでした。黙々と作業をしながら、こんな大変なことを普段は職員がしているんだなと思いました。お年寄りのお世話には人手が必要です。そんな中で、私たちに時間を割いてくれたと思うと、しっかりやろうという気持ちが湧いてきました。作業を終えると疲れと同時に達成感も湧いてきました。



ボランティアというと、自分の時間と労力を提供し、人の手助けをすることだと思っている人がほとんどでしょう。ですが、それだけではないと気づきました。

その後も私は機会があればボランティアに参加するようになりました。地域のお祭りでは、職業体験の受付をしたり会場の清掃や道案内をしたりしました。お客さんから「ありがとう」と声をかけていただいたこと、いろいろなお話をしたことは、私にとって大切な思い出です。お話を聞いて初めて知ったことや「こんな考えもあるのか」と思ったことがたくさんありました。確かに、楽ではありません。けれど、それ以上に得るものがある。それが、私がボランティアを続ける理由です。

昨年度、保育園児と触れ合った時のことです。子供たちは最初緊張していて、顔がこわばっていました。私も初めてのことで、どうしていいか分かりません。そこで、園児だった頃を思い出してみました。自分よりはるかに大きい中学生が、大きな声で上から話しかけてきたらどう思うだろう。恐怖です。私は、接し方を変えてみました。しゃがんで目線を合わせる。声は明るく、でも、大きすぎずに。すると子供たちも打ち解けてくれるようになりました。帰るときには、子供たちの一人が、私とハイタッチをしてくれました。とてもうれしかったです。善意があっても、自分の行動が相手からどう受け取られるのか考えなければダメなんだと学んだ体験です。また、幼い頃、先生たちにこんなにも気を配ってお世話してもらっていたんだなと気づくことができました。先生たちの手助けができて、誰かを支える側に立てた喜びも感じました。

社会の一員であるということは、こんな風にお互いに支え合うということではないでしょうか。まだ学生の私たちは、意識することが難しいかもしれません。ですが、私たちは社会の中で周りの大人に助けられて成長してきました。保育園、学校、育成会、部活動やクラブ活動…、私たちの挑戦や学びはたくさんの力に支えられています。そして、私たちもいずれ人を支える立場に立つのです。

日常生活の中でも、困っている様子の人に「どうしました？」と声をかけてみる、大変そうだなと思ったら手を貸す、ふとした時に、支える側の行動はできると思います。

私は、周りの人に支えられていることに感謝しながら、自分もいろんな場面で人の支えになれるように、たくさんのことに挑戦し、できることを増やしていきます、社会の一員として—

次号では、山口さんの大会に参加しての感想を紹介します。また、地区英語弁論大会に出場した古瀬さん、渡辺さんの感想も紹介します。

【文責：校長 工藤雅史】